

第二章

医学から見た子どもの遊びと発達

Chapter

2

① 子どもの発達における遊びとおもちゃの意味

② 医学的観点から見た就学前の親子の「遊び」と児童発達

2-1

子どもの発達における遊びとおもちゃの意味

榊原 洋一

Sakakihara Yoichi …………… お茶の水女子大学教授

子どもは遊びを通じて学び、発達してゆくといわれる。近代幼児教育学の父であるフレーベルは、遊びや教具(教育的おもちゃ)を重視した幼児教育を提唱した。

ではなぜ遊びは子どもの発達にとって重要なのだろうか。

子どもの発達にとって遊びが重要であることは、さまざまな視点から論証することができる。哲学的な視点や経験論的な視点ではなく、科学的な視点で、遊びやおもちゃが子どもの発達に果たす役割を考えてみようというのが、本稿の目的である。

●おもちゃ・遊びを介した子どもの発達

子ども、特に年少の乳幼児の発達過程を詳しく見てゆくと、子どもが身の回りにあるおもちゃと関わりながら(遊びながら)発達してゆくことがよく分かる。ここで「関わりながら」「遊びながら」と同格に扱ったが、おもちゃで遊ぶことによって、乳幼児は私たちが住んでいる世界の構造と仕組みを学習してゆくということだ。

●リーチングの発達

おもちゃを介した遊びが、子どもの発達に密接に関わっている良い例が、リーチン



グだろう。リーチングは日本語で「手伸ばし」のことだが、生後3~4ヶ月になって、自分の腕を自分の前に持ってゆくことができるようになるころから盛んに見られる行動である。リーチングには必ずその対象物(人でもよい)がある。乳幼児のリーチングの対象として最も頻繁に選択されるのが、ガラガラなどのおもちゃだ。通常、子どもは視覚的にリーチングの対象であるおもちゃを確認し、そちらに手を伸ばしてゆく。手先に印をつけて、手先の軌跡(動く筋道)を調べると、5ヶ月くらいの乳児の手先は対象物まで複雑な曲線を描いて到達する。しかし2歳くらいになると、大人同様に滑らかに対象物までの最短経路(ほぼ直線になる)を通して動いてゆく。私たち大人にとってはなんでもない動きだが、乳幼児は生活の中で何万回も、ものをつかむ動作を繰り返して、大人の手先の動きを獲得するのだ。お

もちゃである必要は必ずしもないが、このリーチングという、手を自由に操る動物の代表である人間の技を発達させる道具として、ガラガラや積み木などのおもちゃが活用されているのだ。

●つまむ

年少の乳幼児はリーチングで到達したおもちゃなどの対象物を、手のひら全体でつかむ。手掌（しゅしょう）把握と呼ばれる乳児期のつかみ方は、まだ^{ぼし}拇指（親指）とその他の4本の指が向き合う洗練された把握方法ではない。しかし、新しいものへの好奇心に駆動されたリーチングを頻繁に繰り返しながら、次第に拇指と他の対向によって生じる「つまむ」動作に変容してゆく。そして1歳前後になると、拇指と人差し指あるいは中指によるピンチつまみが可能になる。このピンチつまみが、私たち大人が日常生活をする上でいかに重要かは、ピンチつまみを使わないでボタンをはめたり外したりする行動を試していただければすぐに分かる。乳児はおもちゃを握ったり、身の回りにある様々なものや、操作性のあるおもちゃで遊んだりしながら、指先の複雑な動きを身につけてゆくのだ。

●操作と随伴性

子どもはただ握るだけでなく、身の回りのものやおもちゃを「操作」する。ハイハイを始めると、部屋の中で手の届くところにあるものはこの「操作」の対象になる。引き出しのつまみや、ビデオやテレビのスイッチ類は、真っ先に操作されてしまう。電器のコードやカーテンの紐などの細長いものを引っ張り、あらゆる穴に指を突っ込んで触りまくる。こうした行動が、不幸な事故（感電、電気ポットによるやけど）などの原因になることはよく知られている。

操作することで何か新しいことが起こる

と、子どもの関心はさらに増す。スイッチを押すと音や画像が出たり、電気がついたりする「結果」を楽しむ。行動の結果、あることが起こることを「随伴性」と呼ぶが、この随伴性は子どもの好奇心を刺激するだけでなく、物事の因果関係に気づく契機にもなる。

操作性のあるおもちゃで遊ぶことは、ハイハイなどで移動し、指で細かなものをつまむことのできる子どもにとって、大変魅力がある。つまみを引っ張ったり、ボタンを押したりすると、音がしたりおもちゃの一部が動いたりすることで、子どもは自分の行動が何か別の動きの原因になることを学習するのだ。

●共同注意の発達

7～8ヶ月の乳児は、他人の視線の先にあるものに関心を示し、自分もその対象物（者）を凝視するようになる。共同注意（注視）の始まりである。共同注意をするためには、まず乳児は他人の視線に気がつかなければならない。参照と呼ばれる、人の顔を見る行動は、子どもの社会性の発達の第一歩なのだ。子どもが他人と視線を共有し、その視線の先にあるものを見つめる共同注意行動が始まる道筋は2通りある。

第一の道筋は、最初に他人（母親など）の視線に気がつき、その先にあるものを見るという道筋だ。乳児は母親と対面していないときでも、時々母親の顔を見ていることが分かっている。一時的に母親に顔の表情をとめてもらうスティル・フェイス実験を行うと、子どもは自然な動きのない母親の顔に驚き、母親のそばに寄ってきたり泣いたりする行動を起こす。

第二の道筋にはおもちゃが登場する。もちろんおもちゃでなくてもよいのだが、子どもはガラガラや積み木に関心を持った後、

そばにいる母親がその対象物を見ているかどうか、顔を参照して確かめるのだ。

一見なんでもない行動である共同注意は、子どもが他人の気持ちを理解し、社会性を発達させてゆく上で極めて重要なステップである。保育現場でよく見られる、親子で一緒におもちゃで遊ぶ行為には、こんな秘密が隠されているのだ。

●大人の行動を真似る

子どもに見られるもう一つの本能的行動に、真似（模倣）がある。こちらから誘わなくても、乳幼児は大人の行動の真似をしたがる。

アメリカの発達心理学者のメルツォフは、子どもの模倣本能を面白い方法で示した。1歳半から3歳くらいの子どもの、大きなボタンが上部についたおもちゃを見せる。子どもがおもちゃを見つめているとき

に、前に座った大人が上部のボタンを手ではなく額で押して見せる。翌日、同じおもちゃを子どもの前に置き、自由に遊ばせる。すると、過半数の子どもが、大人がやったのと同じように、額でボタンを押したのである。

初めて見せたときに自由におもちゃに触らせると、大部分の子どもは指でボタンを押すのに、前日に大人がやっているのを見た子どもは、大人と同じような行動をとったわけだ。

大人の行動を真似したいという子どもの本能に応えるおもちゃはたくさんある。ままごとセットに始まり、おもちゃの電話や自動車のハンドルなどは、そうした子どもの本能的行動に応えたものだ。もちろんこうした模倣は、将来本物を扱うときの準備行動となるのだ。

Child Development and Toys

● Sakakihara Yoichi

Almost ninety years ago, the Swiss development psychologist Jean Piaget conducted experiments that vastly changed the field of child psychology. Based on observations of his own children, he showed how children come to understand the relation between the world and themselves and learn the rules that govern it. Piaget was mainly interested in understanding the mind of the child, and he tried to do so not from an adult's point of view, but by observing the real behavior of children.

Toys are the point of contact between children and the world around them. A few months after birth, infants are able to grasp small toys. They gaze at them, taste them, and shake them to make noise. For infants, who do not yet distinguish between the self and the external world, they realize that by shaking the rattle, they can hear a sound and when the rattle is released, it disappears from their field of vision. While they do not know the reason, they come to understand a basic causal relation between a particular action and phenomenon.

For children, the world is constructed of things, such as toys, and people, most typically their parents and teachers. Toys do more than just promote the above learning; they also function to enrich human relationships. When the mother shakes the rattle, the infant first stares at it, but then immediately perceives the mother's face in the background and notices her expression. This joint attention, the act of focusing on the object of the mother's gaze, is the first step to developing sociability. It is through toys that infants begin to develop social skills and an understanding of the world.

子どもの発達段階ごとに、おもちゃとそれを使った遊びは、子どもの発達を側面から支える貴重な役割をもっていることがお分かりになったと思う。

榊原 洋一

医学博士。お茶の水女子大学教授。チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) 副所長。日本子ども学会副理事長。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞。二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授。

主な著書：『オムツをしたサル』（講談社）、『集中できない子どもたち』（小学館）、『多動性障害児』（講談社+α新書）、『アスペルガー症候群と学習障害』（講談社+α新書）、『ADHDの医学』（学研）、『はじめての育児百科』（小学館）、『Dr.サカキハラのADHDの医学』（学研）、『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』（講談社+α新書）など。



Sakakihara Yoichi : M.D., Ph.D. Professor, Ochanomizu University; Deputy Director of Child Research Net (CRN); Deputy Director of Japanese Society of Child Science. Specializes in pediatric neurology, developmental neurology, in particular, treatment of Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD), Asperger's syndrome and other developmental disorders, and neuroscience. Interests include mountain-climbing, listening to music. Father of two sons and a daughter.

Born in Tokyo in 1951. Graduated from Graduate School of Medicine, University of Tokyo in 1976, and taught as an instructor in the Department of Pediatrics before becoming professor in the Research Center for Child and Adolescent Development and Education, Ochanomizu University.

Major publications include *The monkey who wares diapers* (Kodansha), *Children who can't concentrate* (Shogakukan), *Hyperactive children* (Kodansha + α Shinsho), *Asperger's syndrome and learning disorders* (Kodansha + α Shinsho), *The Medical science of ADHD* (Gakken), *The critical and sensitive periods of the child's brain development* (Kodansha + α Shinsho).

医学的観点から見た就学前の親子の「遊び」と児童発達

郭 煌宗

Kuo Huang-Tsung …………… 中国医薬大学付属医院児童発達行為科主任

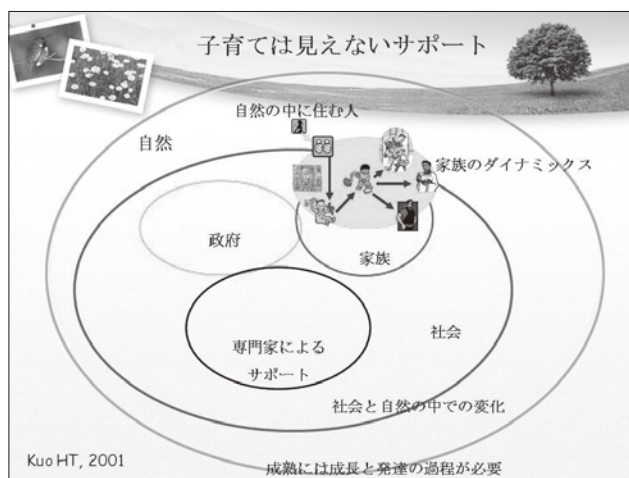
● 育児 (parenting) の意義

「発達」とはつまり、ひとつの生命体がこの世に生を受け、誕生し、ゆっくりとした成長を経て、一人の自立した人間になるという過程である。発達の重要な目的は、一人の「自立的で、健康的な、正しく機能する成人」(autonomous healthy well functioning adult) になることだ。しかし、その前提として、実際には、いくつかの基本的な過程が必要である。生理的欲求を満足させるほかに、安全な愛着 (secure attachment) を形成するということだ。この安全な環境を提供することこそ、親の役割 (parenting = 育児) なのである。—— 図①参照

しかし、parenting (育児) にはそれ以外の内容も含まれている。定義から見て、parentingは、基本的に種の生存に関わるプロセスである (Potts and Short, 1999)。種が続くためにはまず繁殖する必要がある、その後、誕生する。誕生した後は、成長した個体がそれを保護しなければならない。そのため、このプロセスには保護養育の行為が必要で、それらを総称してparentingと呼ぶのである。

農耕社会の時代、父母は生活することに忙しくて、子どもは多くの場合とても早く独り立ちして、父母から離れていた。しかし、現代社会においてしばしば見られるのは、子どもが既に大学に入ったり、場合によっては大学院を終えた後ですら、父母がまだ子どもを手放せないという状態である。そのため、人類のparentingへの依存がますます強まっていると言える。子どもによっては大変幸運で、理想的なparentingの環境に育つことができるが、そうではない場合は、望ましい形で面倒をみられることがなく、たとえ犯罪に手を染めなくても、なお、“檻の中に住む”ことになる。

生命はとても貴重なもので、
生命の成長はとても繊細な過程



図①

である。私は日本に行ったとき、偶然良い機会に恵まれて、医師のサワダケイ氏に伴って家庭訪問をした。サワダ医師はparenting skill (育児のスキル) の伝達が早期に始められる必要があるということを深刻に感じたため、新生児の家庭に対するサービス、特に父親のparenting skillを高めるサービスを始めていた。文化的な要因、仕事上のプレッシャーや、その他の要因が影響して、父親は通常parentingを行う能力に乏しい。しかし、サワダ医師が、どのように子どもを抱くかに始まり、基本的な子育ての仕方についての模範を示すと、多くの父親は、どこちなさは残るものの、そのほとんどを理解することができていた。

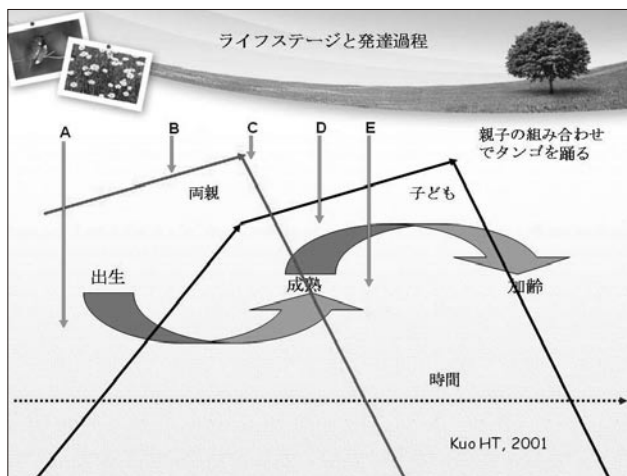
このほか、子どもに生命とは何かを学んでもらう研究プランは、とても印象深いものだった。このプランでは、妊娠したばかりのお母さん数名を幼稚園に招いて、子どもたちに紹介するのだ。妊娠が始まるこの交流で、母親と幼稚園の子どもたちは愛と期待に満たされる。物語や絵本、または超音波といった方法で、子どもたちは徐々に胎児を知り、赤ちゃんが母親のお腹の中で日一日と大きくなることを見ていく。そして赤ちゃんが生まれ、1歳過ぎになるまで交流し続けて、このプランは終了する。

私が訪れた日は、ちょうどこのプランが終了するところで、子どもたちは絵を描いて、自分と赤ちゃんやその他の人との関係を説明していた。絵は、彼らが環境の中で他者と関係を持つことや、1人ひとりの子どもがみんなこのような小さな命で、宇宙からこの世界にやってくるのだということを実際に表している。この子どもたちが大きくなった日には、かつて自分たちの面倒を見てくれた父や母の面倒を見るのだという、労りを学ぶ環境をつくる必要がある。これがつまりは生命の過程であるからだ。生命の過程は、基本的には出生から成熟、さらには衰えて老いるまでを指し、子どもたちの上向きの発達は、徐々に少なくなって、やがて下降していく。父母もまた同じである。この二つの生命(両親と子)の関係はタンゴを踊るのに似ており、幸運な場合はタンゴを踊り続けるが、それは常に続くとは限らない。—— 図②参照

●生命の誕生と父母の関わり

私は生命現象を「4つの生(生理、生存、生活、生命)」に分けて考えている。どのような宗教的信仰も、哲学も、基本的に生命をこれらの内容によって定義している。私たちが「生」について語るときには、それが

先天的なものか後天的なものか(Nature or Nurture)について議論になることが多い。実際にはそれは比率の問題で、皆が共通の認識を持っているとは限らない。ただ、先天的なもののうち変えられるものは少なく、後天的なものは変えられるものが若干多いのは事実である。しかし、私たち人間においては、既に決定された先天的なものについても、時間の経過や周囲の影響で、ある程度変えるチャンスがあると、私は信じている。



図②

出生前の生物学的因子について、よく知られているように、あるタイミングで生命は母親の胎内に宿る。そのタイミング、あるいはその他の要因によって、胎児の在り方（健常か、特別配慮のいる状態か、機能障害などがあるか）が決まってくる。しかし、私たちがよく見落とししたり、当たり前のこととして見過ごしたりしてしまうのは、母親の妊娠過程の身体的な変化である。例えば、自分が妊娠2ヶ月であることを知ったばかりの頃、母親は、身体に起こった変化や、自分と環境の変化に違和感を覚えて、感情が容易に高ぶったり、心に多くの矛盾を抱えたりする。以前と同じような出来事に対しても、以前とは違った反応をすることがある。例えば、以前は自分の母と喧嘩しても、喧嘩し終わればそれで済んでいたものが、今度は自分が母親になることで、自分の成長が脳裏に浮かぶようになり、様々なことを考えるようになる。これは夫、つまり「父親」の役割についても言えることである。父親について言えることは、母親にとっては当たり前のことでも、父親にとってはより多くの機会や学習が必要だということである。つまり、結論としては、父母の準備が整い、祝福される環境が整ってこそ、子どもは自然に、幸福になりうるということである。

幸運な出生を受けた場合でも、不利な環境的要因が後に持ち込まれることで、発達によくない結果をもたらすことがある。そのような場合には、早期の介入が必要であるが、その際には、保護者の意識的な介入が成功するか否かが重要な鍵を握っている。しかしながら、保護者が専門的な知識を持っていないことが、早期の介入にあたって最も大きな問題の一つである。そこで、介入に当たる専門家の役割が重要になってくる。専門家は、親に分かりやすい言葉でどのように介入していくかを説明し、具体的に教えるべきである。やり方が分かれば、保護者は正しく子どもと接することができる。

保護者がより多くの時間を使うことは、理論上、専門家の介入よりも効果的であると考えられる。

もし親子が健全な状況にあれば、子どもの発達を促す最も簡単な方法は「遊び」である。「遊び」は非常に小さいときから始められ、とても簡単な方法であり、子どもの発達に必要である。早期の親子関係が子どもの発達に及ぼす影響を探るとき、「遊び」は親子関係の過程における重要な要素であるが、注意すべき点が3点ある。1. 早期の親子関係が乳幼児の発達に及ぼす影響とその重要性、2. 個体の相互作用に影響する要素、3. 相互作用の過程とその調節や親子遊びの内容と種類、である。ただ、その内容はかなり複雑であり、ここでは簡単な説明にとどめることとする。育児は、人類の誕生と共に始まった、古いものである。早期の段階において、育児の目標は異なっていたが、現在では、育児が抱える問題は明確になってきている。すごいスピードで変化するこの世界の中で、多くの子どもたちが無視をされたり、適切な対応をされなかったり、ひどい場合は虐待されるなどして、深刻なマイナスの影響を与えられているのだ。

●様々な「遊び」の理論

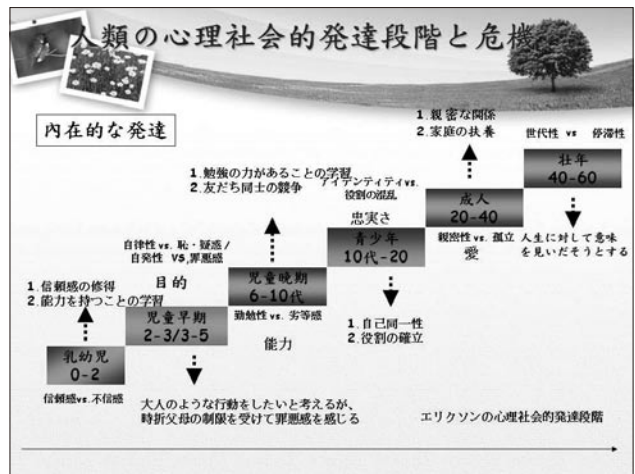
古典的な「遊び」の理論について述べる。1990年初め、Schilleは「遊び」を過剰なエネルギーを消費するためのものだと考えた。また、Lazarusは仕事で消耗したエネルギーを回復するものと考え、Hallは原始的な本能だと主張し、Groosは将来成人になるための準備であると提唱した。「遊び」理論の発展の過程は、身体に関する考え方から機能に関する考え方に変化している。現代の子ども「遊び」に関する理論で、最も有名なのはFreud（フロイト）で、その次がErikson（エリクソン）である。Eriksonは精神分析理論を受け継いだが、彼の主たる主張は、心理

社会的な発達に重きを置き、内在的な自我に触れることで、自己の能力をその方向に発展させるというものである。このほか、Piaget（ピアジェ）は私が個人的にとっても好きな学者の一人で、彼が強調するのは、学んだスキルを熟練させること、意味と実物を区別し、それによって創造的思考を高めることであった。Vygotsky（ヴィゴツキー）は構成主義を主張した。この理論は現代的なもので、思考し、行動する能力から、適応能力が

生まれるというものである。上述のこれらは、みな抽象的な理論であり、それが意味するものが何であるのかを理解するには、現実的なレベルで考えることが必要である。Eriksonの心理社会的発達理論も、私が個人的にとっても好きな理論である。この理論も第2、第3世代による発展・調整を経たが、現在においても、この1994年に亡くなった学者の影響力はとても大きい。—— 図③参照

● Bowlbyの研究 ——親子の愛着と信頼関係

このほか、人類の社会的・心理的な発達段階について特に重要な意味を持つ学者として、John Bowlby（ボールビイ）がいる。私たち皆が理解しているように、就学前の子どもと父母の関係はとても親密で、近くて、依存的であり（これが愛着関係である）、この関係において、互いに信頼（trust）というものを学んでいる。鏡の中の自分を見ると、人は現在の自分が一体どうしてこのようになってきたのかを考えたりするが、それはそれまでの養育過程と関係している。正しいとか誤っている、あるいは良いとか悪いとかいうことではなく、ただ一つの結果なのだ。そしてまた、これは、他人に対しても、自分に対しても影響を与える。親子の間の信頼関係は、子どもが成



図③

人した後の親密な関係にも影響し、自我統合についての考え方にまで影響する。この信頼関係がすなわち、Bonding（結合）や Attachment（愛着）と呼ばれるもので、ここでBowlbyが第一層重要になってくる。

Piagetの描いた認知発達においては、年齢と共に発達が進むと考えられている。「遊び」の形態から見ると、感覚的・運動的遊びから、少し大きくなると想像的なごっこ遊び、さらにルールのある遊びへと変わっていく。認知発達の的には、感覚・運動を主とする「遊び」の練習、想像力に依存する象徴的な「遊び」から、ルールのある「遊び」へとゆっくり発達していくということである。

1939年から1945年の第二次世界大戦の期間に、多くの家庭が崩壊したため、研究者にとっては家庭崩壊が子どもに与えるマイナス面の影響について研究する機会になった。この時期にBowlbyは、戦争の間、子どもを安全な地域に移すこと、そしてそれが正しいという考え（現在でも、人々はそうする可能性がある）について研究した。都市に住む父母は子どもを多少なりとも安全な田舎に疎開させることになるが、それは子どもと保護者を分離することになる。結果として、彼らが発見したのは、後に多くの子どもに障害がもたらされたことの原因が、

母親の愛が断たれたことや、その他の関連する事件が元になっているということだった。そこから、彼は複雑な親子の相互作用と、安定した順序でゆっくり進む愛着行動の研究や新たな視点を作っていた。彼らは発達過程にとって親の愛情がその質を保証する重要なポイントであると考えた。歴史的に見れば、Bowlbyが愛着関係と母性剥奪の間の因果関係の研究を切り開き、その後で他の研究者たちが母性の剥奪と関連すると思われる出来事について明らかにしていったと言える。例えば、「心理的に不安定な養育が、愛着関係に障害をもたらす主な要因である」といったことである。愛着関係は親子関係の非常に重要な前提であるが、これは母親や父親との分離、主な養育者との分離によるだけではなく、主たる養育者の子どもに対する関心の寄せ方によっても、その養育過程を不安定にさせ、長期にわたってマイナス面の影響を生み出す主な要因になると言える。

Winnicott (ウィニコット) はもともと小児科医で、後に精神医学の分野へ進み、その後の子どもの発達研究に大きな影響を及ぼした。彼は「ほどほどに良い子育て」(good-enough parenting) という考え方を提示し、両親に期待する一つの目標とした。つまり、最善を目指すような方法ではなく、自分が到達できる最も良い状態を自分にとっての基準にするという考え方である。現実の社会で、この意味でよく親としての務めを果たしていると言える父母は、みんな子どもに対して無条件の愛と信頼できる世話を与えており、子どもに対して安全な環境を提供し、潜在的な発達の力を十分に発揮させることができている。しかし、それぞれが先天的に持つ条件には違いがある。Ainsworth (エインズワース) やその同僚たちは長期間の研究を経て、Bowlbyの愛着関係の研究を進展させた。それは愛着という考えを専門家にも一般の人にも広く受け入れられるように展開したものである。良い

子育て過程は良い結果を生み出し、安全な愛着は良い子育ての鍵となる。それは発達の中で子どもが良くない環境に対抗するときにおいても生涯にわたって防護壁を提供する。Ainsworthの著作は、私が1989年に海外に行く際に役立った。私自身が彼から受けた影響はとて深い。

●親子をとりまく生態系と相互作用

さらにBronfenbrenner (ブロンフェンブレナー) にも言及しなければならない。彼はマクロ、ミクロ、メゾという生態学的理論を提唱し、それは現在の社会福祉に影響を与える重要な見方となった。これは、子どもと父母の社会及び生態的な相互作用について明らかにしている。イギリスで90年代に始まった「Sure start program (確かなスタートプログラム)」は、Bronfenbrennerの見方を代表するものである。

子ども一人ひとりには特質があるが、Thomas & Chess (トーマスとチェス) が十数年の長期研究の結果、1995年の発表で明らかにしたのは、子どもの気質は、その両親との相互作用によって、非常に異なる影響を受けるといったことだった。彼らは「最良の適合 (goodness of fit)」という視点を生み出した。もし、親が自分と子どもは独立して、まったく違った2人の人間であるということを理解しなければ、多くの衝突が容易に起こってしまうということである。“goodness of fit” は、我々が相手を理解しなければならないこと、自分を理解しなければならないこと、その最も良い調整のことを意味しており、それは“regulation (調節)” と言われている。regulationは2000年から2010年の間にゆっくりと作られてきた観点である。このほかPatterson (パターソン) と彼の同僚は、別の観点から家庭の履歴を観察し、両親が子どもからの反抗を受けたときに、しばしばマイナス面の行動に出

てしまい、それが子ども側のマイナス面の反応を生じさせるという、負の連鎖が確実に親子間の否定的な人生を生み出すことについて探究した。

この反応の悪循環は、親子や仲間との生活の中に見られるばかりではなく、仕事上のマネジャーと一般従業員の業務中にも起こりえる。この悪循環が持続すると、大変苦勞する。そのため、父母やその他の人たちが相互作用過程の中で常に“調節”をする必要があり、その中で、社会的学習理論 (social learning theory) を形成していくのだ。

特別な環境にある偉人については、私たちは、その善し悪しを言うことはできない。それぞれの人生にいわゆる独自の創意工夫があって、彼らの育った環境は、少し特殊であるのかもしれないからだ。しかし、95%の人は普通の生活を送っており、普通の人の方法を用いる必要がある。そうすることで、物事は順調に進むものである。もちろん、一般的な方法に原則がないということではなく、ただ、もし私たちが大部分の人たちの「一般的な状態」(common status) を理解できれば、ずっと楽に、順調に進むだろうということである。ここで言っているのは、配偶者や親子、師弟、集団といった関係についてである。このほか、相互作用に影響する要素には動機や興味がある。動機や興味を押しつけない方が、個人の主体性や自発性につなげることができるだろう。

●「遊び」の分類

親子遊びの内容と種類について言えば、「遊び」は基本的に象徴的なもの、主体性のあるもの、楽しいもの、自発的なもの、そして内的動機が引き起こすもの、ルールが導くものといった点で定義される (もちろん遊びのルールは少し大きな、3歳以上の子どもに必要なものである)。「遊び」は相互

作用の過程における挿入曲のようなもので、それは場所や人数、目的や道具の違いによって、また室内・屋外、一人・集団、体力作り・娯楽・頭脳の発達の目的等の違いに応じて、その種類が分けられる。

「遊び」は子どもの発達と関係がある。認知的なものを含む「遊び」があり、練習遊び、象徴遊び、ルールのある遊びに分けられる (Piagetの遊び行動の分類による)。または、機能的な遊び、構成的な遊び、ごっこ遊び、ルールのある遊び、そして社会的な遊び行動という分け方もできる。

年齢が上がるにつれて、子どものそれぞれの発達段階の中での「遊び」の形式は、一人遊び、平行遊び、連合遊びと集団遊び、協同遊びに分けられる (Partenの遊びの分類に基づく)。一人遊びは幼児が一人で遊ぶもので、他の人との相互作用はなく、近くで同じような幼児が同じような遊具で遊んでいるという状況もない。平行遊びは幼児と近くの子どもが同じような遊具で遊んでいるが、お互いに相互作用がないものである。連合遊びは幼児と他の幼児が共に似たような、しかし、同じとは限らない「遊び」をし、「遊び」の中で役割分担や組織化がないものを言う。集団遊びは複数人による遊び活動で、組織化されていて、十分に役割分担がなされているものである。協同遊びは役割分担がさらに細くなる。これらは幼児の発達年齢による能力に関係している。

「遊び」の媒体は遊具である。子どもの「遊び」の発達面では、遊具による遊び、動作性が重視される遊び、社会性が重視される遊びに分けることができる。「遊び」は、身体的成熟から機能的成熟へ、精緻化・複雑化へ、ルール・計画性・コントロールがきいたものへ、さらには個人の違いを生かしたものへと発達していく。これらは個人的な経験によるものである。よって、子どもから大人に至るまで、「遊び」は内容を変え、

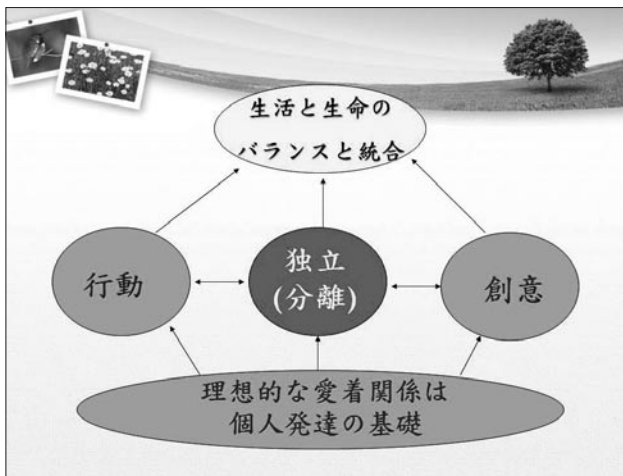


図4

構成を複雑化させていくが、この変化は、幼児の発達と関係が深く、また、自ずと学習とも関係している。更に、認知能力の向上、自信の獲得、そして「遊び」自体が快樂であることも重要である。私たちは退屈などによく遊びたくなる。例えば、地下鉄の中では多くの人が「うつむき族（街角などでうつむいて携帯やiPhoneなどを使用している人たち）」になって、自分の携帯電話でゲームをしている。

●大人による「遊び」への介入の意味

成人の親が「遊び」に介入すること（例えば就学前の親子の相互作用の観点や、「遊び」と子どもの発達の関係性の観点等において介入すること）には、いくつかの要素が求められる。それは、子どもと打ち解けた相互作用を作ること、相互の愛着関係を形成すること、「遊び」への集中力や持続力を増大させること、「遊び」の質を向上させること、仲間同士の相互作用の質を高めること、子どもに最も良い発達領域（ヴィゴツキーの「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）」を作り出すことなどである。

私たちは親子間、保護者や被保護者の間、あるいはまた師弟の間には、いずれも影響を及ぼす力があることを知っている。子育てに

おいては、子育て活動や子育ての要素のいずれにも「面倒を見る」と「コントロールする」ことの両面が存在している。ここでの「コントロール」というのは、決して本当にコントロールするというのではない。子どもの面倒を見る過程で、「遊び」や活動を通して子どもを観察し、評価を行い、介入することができるが、これは「遊び」という活動の延長なのだ。親子関係には独特の性質があり、学齢前の親子の相互作用は子どもの発達にとって重要な要素であり、決定的な影響力を持つ。「遊び」の方法と内容が鍵なのである。

私は、愛着関係が個人発達の基礎であり、個人が順調に独立する前提には良好な愛着関係があると信じている。そうでなければ、子どもが離れるときに、父母の期待した状況は得られず、あるいは衝突が生じる。子ども自身も処理できず、父母もどうしてよいか分からず、生きることはとても苦しいものになる。個人が独立できれば、一人で行動することができる。一人で行動することで新しい発想を生むことができ、その後の生活はバランスの取れたものになるのだ。一人ひとりの生命が発達する過程で、すべての人がバランスの良い生活と統合された内面の両方に配慮できることを私は願っている。—— 図4参照

Parents - Child Play and Child Development

● Kuo Huang-Tsung

It is common knowledge that child development is determined by nature and nurture, but views differ regarding their influence and relative weight. As nature is much less subject to modification, it becomes important to focus greater efforts on nurture.

If nurture is the site of our efforts, it becomes possible to consider such factors as time, the human element, and method. Regarding the time factor, we can say that under appropriate conditions, earlier efforts produce better results. The human factor places priority on the parent-child relationship because of its strong correlation with child development, and here it is important for both parent and child to be mentally and physically healthy. As for methods of nurturing, play is the most convenient method. Play between the parent and preschool child is a particularly good way to promote development.

Before discussing play, it is important to understand the following three aspects: (1) the influence and significance of the early parent-child relationship on child development; (2) factors that affect interaction; and (3) the process and regulation of this interaction. Next, we need a basic awareness of the content and type of play between the parent and preschool child, and finally, a better grasp of the process of child development and the influence of the play.



郭 煌宗

ドイツ、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学医学博士、台湾小児科医小児神経科専門医。中国医業大学付属医院児童発達行為科主任。中国医業大学医学院(科)小児科学副教授。

これまで中華民国発達遅滞児童早期療育協会初代理事長、台湾小児科医学会児童発達委員会主任医師、台湾小児神経科医学会理事、中国医業大学付属医院小児神経科主任を務める。国家衛生褒章、国家品質褒章、早期療育金棕櫚賞、全国児童守護天使を獲得。

主要な著作は臨床小児科学の論文の他に、『童心瑠璃』『小さな天使を煩わす』『小さな龍を育てる』等がある。

Kuo Huang-Tsung : M.D., Ph.D. Division Chief of Developmental and Behavior Pediatrics of China Medical University Hospital. Department Chief of Tainan Municipal An-Nan Hospital-China Medical University; Associate Professor of Pediatrics, Graduate School of Medicine, China Medical University, Taiwan; Ph.D., Faculty of Medicine, Ludwig-Maximilians-Universität München, Germany. In the past, founder of the Chinese Association of Early Intervention Professions (CAEIP); Committee Chief of Child Development, Taiwan Pediatric Association; Board Member of Taiwan Child Neurology Society (TCNS); Division Chief of Pediatric Neurology, China Medical University Hospital; National Public Health Award, National Award as Guardian Angel of Children; Gold Palm Tree Award for Early Intervention Professions. In addition to papers on clinical pediatrics, major publications include *The jewel of a child's mind*, *Little angel with trouble*, *Raising a small dragon*.

